

昭和三十四年七月二十三日第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第九十二号）

目

大いなる受入れ……………池山榮吉…(1)

無碍の一道……………花田正夫…(5)

次

往生について……………福島政雄…(9)

慈光

第八卷 第十一號

大いなる受入れ

池山榮吉

今春以来、私は大谷大学の専門部の学生に向つて、自分の信仰の體驗について、約七、八回にわたり講話をして来ました。その都度、いつも『歎異鈔』の「親鸞におきては……」の一節に及んで行かねば、どうも自分の體驗した信仰が言ひ表はしにくかつたことを告白せねばなりません。そこで今日もまた当然そこが中心となるであります。

然し、むしろ私は「大いなる受入れ」と題し、私共の幾多の先達の方々が經驗なされた、尊い信仰入門の動機に就いて申し上げようと思ひます。

去年の暮から、今年の春にかけて、歎異鈔の第六章の有名な「親鸞弟子一人も持たず」といふと、底ろを深く味はして頂いてから、かつて感じてゐたよりは更に深く、玲瓏玉の如き聖人を拜することが出来ました。

信仰に入るには色々な事柄が解つたとか、智慧をもつてゐるとかでは、大抵の場合邪魔にこそなれ、決して役立つてはくれない。それには尊い體驗が必要であります。これがなければ、望んでやまぬ信仰は確立しないといはねばなりません。

さて、親鸞聖人は、その尊い體驗を何時得られたであらうか。それは吉水の入室と申して、六角堂の百日の御參籠の後、吉水の法然上人を、その御庵室に御訪ねなされた時であります。その時の模様は、歎異鈔の第二章に

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よき人の仰せをかふむりて云々」とあつて、これを明にしてあります。

まことに親鸞聖人は斯く心を虚うして、つまり裸身になつて、御師匠、法然様を御たづねなされた時に、ピタツと御自身の心の中に、法然様の御言葉が融けこんで、あの尊い他力攝生の妙諦を受入れたのであります。

私共はさて何時、まるはだかの心になり切るだらうか、生涯に一度の廻心は、何時味はれるでありますか。

これを普遍的に、解り易い譬をもつてお示しになつたのが、かの有名な善導大師の二河白道の譬であります。

旅人が西をさして行く。とある日、気がついてみると寂

そして第二章の「親鸞におきては、唯念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よき人の仰せをかふむりて、信ずるほかに別の仔細なきなり」の一節に表るる聖人の御性格とを拜して、信仰に入るには、先づ無に入らねばならぬものであることを証りました。

昨今は土用夏で、酷しい暑さに朝から汗だくで気も遠くなりさうであります。しかしこの汗だくの夏の私共の身体も湯に入ると、今迄の不快感を忘れてサラリとした気持ちになります。

同様に、この煩惱に汚れた身も、歎異鈔によつて、一度信仰に入れば、サラリとした軽いおちけぬ心になるので、私は勿體ないことながら、歎異鈔は、入浴案内のやうな役目を果して下さるものと思ひます。

その湯に入るには裸体にならねばなりません。それではどうして裸体になるのか。

しい処に来てゐた。

ふとろしから怪しげな声がする。見れば恐ろしい獣と多くの賊。それがその旅人を襲うて来た。旅人は恐怖の余り前方へ走り去り出した。

すると大きな河が横たはつてゐて、道をさへぎつて行けない。半分は火の河で、半分は水の河であり、その中に一本の細い白道が辛うじてある丈である。

どうしたものかと、後や左右からせまる恐しさの中に途方に暮れて立つてゐる。とその時、はるか西岸に人がゐて、その白道を通りて彼岸に渡れ、案ずることはない、と声をかけてくれた。旅人は勇み立つて、覚束なげな足取りで細い白道をゆき、遂に彼岸に渡り了る。

——といふのが有名な二河白道の譬であります。

私共は自我と申して、俺が、といふ感じがまことに強くあります。しかしして人生に於ける成功や失敗といふものは多く自我の感じのゆき方によつて決るものではあります。

然しこの俺の感じが信仰の門に入るに必要なものであらうか。自我の考は様々なる煩惱となつて、我と我身を縛り、どんなに焦るとも、信仰の門に入ることは許されないのであります。

信仰を得て、間違ひない往生を願ふ人は、一つなる希望に燃えて、自らの心を虚にして、先達の教ゆる声をきき、

指す方に突き進まねばなりません。しかしその時の希望として、それが自我、煩惱に根ざすものであつてならぬことは申すまでもないことであります。

独逸にニイチエといふ哲学者がゐます。この学者は、彼の『ツアラトストラ』といふ書物の中に

「ほんに人間は汚い流れだ。この汚い流れを受けて、自らも亦汚れないためには海でなければならぬ」といつて居ります。更に

「私は超人を教へる。超人こそはその海に比すべきである。その海ともいふべき超人の世界へは、お前達自身の見下げ果てを感ずる者のみ、超人の領域に入ることを得る。お前達が経験し得る中で最大のものは、大いなる、自らの見下げ果てである。自分の理性も智慧も道德をも総てを見下げ果てた時が超人だ。」

人間は綱だ、人間と動物との間に掛けられた綱だ。この綱は危い渡り、道すがら、かへり見、わななき、立止りがある。しかしそれをもかへりみず、その綱を渡らうとする者こそ人間であるべきだ」

と云つて居ります。これはまことによく仏教の二河喩に似て居りますが、恰もニイチエといふ人は、シヨベンハウアーといふ学者を知つてをり、そのシヨベンハウアーは、仏教思想に通じてゐたから、自然とこの人の頭の中にも仏

る態度が見えませぬ。

さて、親鸞聖人が大いなる受け入れをなされた刹那は、どのやうなものであつたらうか。聖人の道をおもとめなざる熱烈さは、つきつめて六角堂の百日の御参籠となつた。それは恰も草提希夫人が、その子の阿闍世太子によつて、牢に幽閉せられた時、思ひ余つてつひに合掌して、釈尊に救ひを求められたと同じであつたのです。

満願の日の帰途、聖人は吉水の禪房に歩みを運ばせられました。宿善開發の心の催しに、さそ足の運びも軽くあらせられただらうと思はれます。それはすでにその時、仏の力が予感せられ、御足が吉水へ向つたのは、御心が他方へ他方へと向つてゐたからであります。

そして御対面なされるや、御師匠、法然様の何もかもが、どつと親鸞聖人の御胸の中に融け込み、しつかりと落付いてしまつたのであります。

その時のおよるこびが、歎異抄の中に「親鸞におきてはただ念仏して……」とあつてこれを明かにせられてあります。その時の聖人は、二十九年の御生涯中に得られた、智慧、才覚、あらゆるものを御捨てになつて、吉水の禪室を御たすねになり、一語は一語と、御師匠、法然様の仰せをおききになつた時

「お、左様で御座いましたか……」

教思想が入つてゐただらうと考へられます。とまれ個人から全人に向ふ道程をかやうに示していることは深い興味をそそります。

その超人には成り度いものだと、羨ましくてならぬが、私共はその反対の煩惱具足の凡夫であるばかりに、超人になり得ぬ悲しみがあります。

親鸞聖人もそこを「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し、云々」と、御自分の不甲斐なきを歎かせられました。が然し、その聖人は、その中より、この煩惱の繫縛からのがれて、菩提の道に入りたいと、いそしまるる御心持、御希望があらせられたのであります。ここが尊いのであります。

歌人、石川啄木は、その子に

この親にも、親の親にも似るなかれ、
かく汝が父は 思へるぞ兎よ

といふ一首をのこしてをります。それは啄木自身の運命といふものが、好ましいものでなかつた。むしろ悲哀や、苦悩にみち／＼のものであつた為に、願はくば、我が子達よ、お前達は親の俺にも、その祖父にも 似てくれるな、それは悲しいつまらぬものであつたからだ。お前達は、お前達の望ましい運命を持つやうに、と歌つたものであります。この中には子等への絶大の愛は感ぜられるが、啄木自身、心をうつろにして、更に上なる大きな力を受け入れ

といふ大きなうづきが御心に感ぜられなされ、その一刹那に、従来の自力聖道の求道の御生活から、他力浄土への道につき進まれることになつたのであります。

さて酒飲みが酒屋に徳利をさげて買ひに行つても、酒が無ければ手を空しくして帰らねばならない。当時、聖人が梅尾の明恵上人をおたづねなされたものとすれば、どうであつただらう。恐らく求めるものが与へられぬ御悩みを抱いて、空しく帰られたのであります。

法然上人は実に親鸞聖人の求めなされるものを、豊に持合せて御出でになりました。それは四十三年にわたる長い年月の尊い御体験であつたのです。その長い間の御体験とは正しく二つで、自力聖道と、他力眞生とであります。

しかしてその二つは同時に合せ持たれたのではなく、前者が形を潜めて、後者がその位置にいたのであります。

「オ、左様で御座いましたか……」

と大きく受け入れられた刹那に、聖人御一人の救済が決つたばかりでなく、七百年の後に生れ出た私共、更に今後幾久しく人の子の存在する限り、その救ひの光が成ぜられたと見るべきであります。実に尊きことは大いなる受入であり、これこそ信仰の門に入る大きな鍵であります。

完了

無 碍 の 一 道

花 田 正 夫

十一月七日の池山栄吉先生の第十九回の忌日が近づきました。とおひつ、在せし日の面影が浮んで参ります。

無碍院、釈一道、栄信士、とは、近角常観先生からおくられた御法名であります。一道、無碍、清閑、不二、等々は、念仏讃仰の時、先生が常々申された御言葉でありました。

さて、今年の秋は、
惨怛たる悔いの残せし一一の

といふ先生の遺詠を何度となく想ひ浮べ、ことに「あとかたもなき」の一句に、非常な驚きを感じて居りますのでそのことを誌したいと思ひます。

のない、気の毒な仕打ちをしたものだ。またあの人には迷惑のかけつばなしのままで……等々と、無数の後悔の跡がまぎ／＼と刻まれて、その有様は、上海の大爆撃の跡と同然で、文字通りに惨怛たるものである。

それでもまだ、相手の人が存命であれば、また何時の日にかおわびする機会もあるが、すでに亡き数に入り、幽明境を異にした多くの人々に対しては、全くやりきれない痛ましきである。

そこに「わろからんにつけても、いよく願力を仰ぎまゐらせば……」の他力自然の念仏が浮ぶ。すると不思議にも爆撃あとの惨怛たる市街が、きれいさつぱり整備せられ、破壊した家屋は復旧され、爆破された道路が補装される如き趣があらはれる。その有様はまた、人々が雑踏し汚染した海水浴場が、ひとたび満潮となり、海水に洗はれると、すが／＼しい白砂青松のもと美しい海辺にかへる趣にもたとへられる。

もつともこの歌は、如何ともすることの出来ぬ過去に対する無碍の一道の味ひで、歎異抄第七章の「罪惡も、業報も感ずることあたはず、」のころである。』と説明されました。

以上は池山先生の御言葉の大体で、私の耳の底に残つたものであります。聞きもらしがなけれど、ひそかに念じ

さて国をあげて上海事変で大騒動をして居た頃、先生もすでに六句を越えられてゐた或日、友人数人と先生を蓮華谷の御宅に訪ねました。すると先生は何時もの調子で、手早くこの歌を紙片に書かれて

「五十を過ぎてから、時たまに、どうにも寝つきが悪い、殆んど眠れない夜がある。丁度先日もさうした夜にあつて、寝床に入つたものの、一向に頭が冴えて、さつぱり眠れなかつた。

眠れぬままに、過ぎ去つた追憶が、次から次へとパノラマの様子に写し出され、種々様々の人々も、それからそれへと現れては消えた。そのうちにそれらの人々に対しての自分の罪禍が心を責め始めた。

……あの人には全くひどいことをした。この人には、あの頃まだ自分は若かつたとは言へ、あまりにも思ひやり

て居ります。

只今愚考いたしますのに、この歌は「罪惡も感ずることあたはず」の味ひにあたるやうであります。今一つの歌のたのまるるただ念仏のわれにあり

さるべき業は、さもあらばあれは、未来への無碍の一道の信味で「業報も感ずることあたはず」に相当すると思はれます。

さて、とにも角にも、山と積まれた無量無辺の罪業からの全解放、そこに、人々は、蘇生と、安慰と、活力とを、限りなく恵まれるのであります。

源信僧都の「春雪」といふ題で
さとりえて 思ひとく日にあひぬれば
ほどなくきえぬ 罪のあわ雪
とある御歌もここに想ひ起されます。

又、観普賢菩薩行法經に

一切の業障の海は 一切の業の障りは、はてしな
い海の様であるが
皆妄想より生ず それ等は皆、まよひの想から
生じたものである

若し懺悔せんと欲せば それをそれと真に気づくなれ

端坐して実相を思へ

衆罪 霜露のごとし

慧日、能く消除す

とある経文も有難く思ひ浮ぶのであります。

ば、
いよ／＼仏の御まことを仰ぎ
まゐらせよ。
あらゆる罪禍といふものは、
霜や露にひとしく
仏の真実の智慧のひかりは、
太陽のその如く、よく消除
して下さるものである』

大無量寿経には

『慧日、世間を照して 生死の雲を消除す』

とあります。

山積する一切の罪業の、あとかたもなく消除して下さる
仏智の不思議さ。かくて我等の久遠このかたの無明の暗
夜、に永遠のあけぼののひかりを仰ぐことが出来るのであ
ります。

仏智の光照

仏家がよく引用される譬に

『或人が夜道を歩いて居た。すると道に大蛇が横たはつ

り、身心共に大苦悶におちました。そこで仏弟子であり国
の名医である耆婆大臣が、善巧の限りをつくして仏のもと
に帰するやうに勧め、仏はまた『阿闍世の為に涅槃に入ら
ず』とお生命をかけての大悲を注がれるのであります。

ここに自らの罪業のために、距て心のやまぬ、我慢のや
まぬ阿闍世王も、その全体を覆ひ包まれる大悲心の平等に
して微塵のおへだてのましまさぬに感泣し、随喜するので
あります。

仏は更に『王に若し罪あれば、仏もまた罪をうける。父
の王の供養を仏がうけなければ王にもならぬ。王位につ
かねば阿闍世の欲心も起さず、殺害の罪も無くてすんだで
あらう。故に仏にもまた罪があり責任がある』と申され、
御教誨の最後に及んでは

『狂人が悪事をして責められぬ如く、貪欲の煩惱に狂
うて、親をさへも殺すといふ王の所作を見て、仏はその王
の本心からの所作でないことを知るが故に、呆れ、捨てる
どころか、憐愍の情で一杯である』

と申され、更に力強く

『王は今罪をおそれ苦しんでゐるが、それは幻か、山彦
か、唇気楼の様なものでも実体が無い。智者はその無を知
り、愚者は実有と思ふ……』

と仏智の不思議をあらはされて、虚仮と不実に濁り汚れ
た王の夢をゆりさまされると、王の心は不思議にも業繫の

てゐる。びつくりして、恐れおののきながら、よく／＼し
らべてみると、それは一本の大綱であつた』
とあります。私共は種々な煩惱の雲に覆はれて闇い心で
居るために、繩を蛇と思ひ込んで、恐れ、驚き、苦しみ続
けてゐるが、一度真実の智慧の光明がひらめくと、何のこ
とはない。ただ一本の古綱であつたと知れて、恐怖も、り
きみ心も、解消して了ふと教へられます。

又、高僧のをしへに

『名号のひとつで、遠い昔から無数の罪を重ねて来た凡
夫が、どうして往生成仏することが出来ようか、といふ疑
を持つ者があるが、罪業は凡夫の虚仮不実の心から造つた
ものであるし、名号は仏の真実心から成就せられたのであ
るから、一つは虚であり、一つは実である。虚は実の力で
消除せられる。丁度、千年の暗室も光が一たび点ぜられる
と、刹那に明るくなると同様である』
と述べて、疑の深い我等を啓蒙して下さつて居りま
す。

さて、涅槃経の阿闍世王救済の篇に仏智の重大さが述べ
てありますので、略述いたします。

父王を殺害した阿闍世王が遂に非をさとつて大懺悔に入

一切から解放せられて

『我無根の信を得たり。我無常の身をすてて常身を得た
り。短命をすてて長命を得たり……』
と感泣しながら、随喜、讃仰し続けるのであります。

こゝに阿闍世王が仏の慈悲心に引き入れられ、最後は仏
の大智慧力に廓然として蘇るのであります。

噫、仏智の不思議なる哉。その光を身にふるものは、
『罪悪も、業報も、感ずることあたはず』の、あとかたも
なき無碑の一道の妙味を慮まれるのであります。これこそ
淤泥の中に生じて、淤泥に染まぬ、仏心の蓮華の徳による
のであります。

無明の闇を破するゆゑ 智慧光仏となつたり
一切諸仏、三乗衆 ともに嘆着したまへり

清淨光明ならびなし 遇斯光のゆへなれば
一切の業繫ものぞこりぬ 畢竟依を帰命せよ

道光明朗超絶せり 清淨光仏とまうすなり
ひとたび光照かふるもの 業垢をのぞき解脱をう

往生についで (二)

福島政雄

このお経の上では、前の上の巻のあとの方に詳しく出てをりましたやうな、浄土の種々の有様を極く簡単に述べたといふことになつてをります。

お浄土の味ひと申しますものは、前にも申しましたからもうさう詳しくは繰り返して申し上げませんが、ここを拝読して、かう云ふことを感じます。

お浄土といふところは、それは阿弥陀経でありますと、『西方十万億土を過ぎて国土あり。名づけて極楽といふ』と述べられてありますが、それを私共が、地球の上の地理のやうに考へ、西の方へいくら飛行機で飛んで行つて見たところで、さういふお浄土があるものじやないといふことになりす。

私、学生時代でありましたが、前田慧雲先生、御承知の方も御座いませうが、非常に立派な先生で、仏教の御講義をなさつて、その御講義を種々聞きました、実はこの御

す。

サア、二十すこし越えたばかりでありますし、元來先生の御講義を難しいと思つて聞いて居りましたから、その答の出来ようはつがありません。何と答へたかと今なほ覚えて居りません。よくまあ及第点を下すつたものだと思ひます。どんなことを書いたのか思ひ出さうとしても出来ません。ところがこのお浄土のことにつきまして、そのことをフト思ひ出しました。

さて、かういふ風にお浄土といふものは斯様々々であるを書いてありますが、よく読んでみますと、そのお浄土といふものは、何処か、何かを見たいと思ふと忽ちに見へる。それから、ほんの一瞬間位の間、あらゆる世界の仏様のところへ行つて、そして一瞬にして帰つて来る事が出来る、かう云ふ風にお説きになつてゐる。さういふ世界は何処にあるか、かう云ふ問題になりますと、それは實際の世界より外はないのであります。いくら今の一瞬間飛行機で飛んで行つても、一瞬間に、この世界だけで一瞬間の間にめぐつて来て、会ひたい人に会つて、もう一瞬間の間にここに歸つて来てゐる。さういふことは出来はしません。だからさういふことは物理学上の問題ぢやない。科学の問題ぢやない、といふことになり、どうしても、心

講義は非常にむつかしくて解らぬなりに御講義を聞いて居りました。それで試験の時は困りました。試験問題は「指方立相の弥陀といふのと、唯心の浄土、己心の弥陀といふことと、どう違ふのか、どんな問題になるのか」、サア困つたのであります。難しい言葉でありますけれど、くだいて申しますと、浄土教では、西方十万億仏土を過ぎて世界あり、名けて極楽と云ふ。そこには斯様、斯様の阿弥陀仏を中心とした仏様が、斯様にして居られます。斯の仏の世界は斯様でありますと、詳しく説いてある。つまり方角を西の方、方角を定めて、仏様のお姿は斯ういふお姿であるといふことを説いてある。

ところが禅宗などでは、唯心の浄土、己心の弥陀といふことが説いてある。仏の浄土といつても、阿弥陀如来といつても、それは心の中の問題である。西の方に飛んで行つたからといつてそんなものがあるんぢやない、と云ふやうな風に禅宗などでは云つてあるが、サア、その二つの関係、相違といふものはどう違ふのか、といふことでありま

の問題になる。

かうなりますと、仏のお浄土といふものは、前から申して居ります通り、仏のまことが解れば、仏のお浄土は解る。仏のまこととして、この私を何処々々までも見捨てぬといふ仏のまことがこの私にひびいて来てゐる、といふことがそれがこのお浄土がわかつたといふことになつてくる。

それだから、お浄土といふものを、どんな結構なところであらうが、われ／＼は食ふといふ問題に困つてゐるのに、お浄土は食べないで、何か香だけ嗅ぐと、スツトおな一杯になるのか。何でも欲しいものがあると、スツト現れて来るのか。それはいいところだ、そんな所なら行つて見たい、さういふやうな心をおこしたら、お浄土に決して生れるものではないと、御承知の通り曇鸞大師でありますか、さういふことを云つておいでになりますのを親鸞聖人が引いておいでになります。

さういたしますと、お浄土といふものは心の世界ではあります、只私の小さい心の世界ではありません。心の世界といふことは確かでありませうけれども、矢張り仏の心の世界に私が包み入れられ、取り入れられてるのである。さうでありますからして、お釈迦様が非常に結構なことを云つて下さるのは、非常に結構なことであるが、私共が

目を樂しませ、耳をたのしませる。或は自分の食欲を樂しませるといふことのために、お浄土に生れる。さういふ問題ではない。

さうなりませんといふと、そこで一番大事なることを申しますと、仏のまことを我身にいたたく、といふことになりません。それぢや仏のまことを我身にいたたくといふことは、仏の教といふものを聞いて、その教の通りにすなほに従つて行く。それは音響忍おんきやうにん、徒順忍じゆんじゆんとかむつかしい言葉で言つてありますが、とに角、仏の教を素直すなはに聞いて、従つて行く、といふことが大事であります。

この世界といふものは、生じたり、滅めつしたりしてをると私共には見えてゐるけれども、仏のまことを以てすれば、その生滅しやうめつ流転りゅうてんするこの世界を底の底まで見とほして、この世界の全体を見透しておいでになるが故に、私共をそのまの姿において、煩惱があれば煩惱のある姿において、スート仏の廣大無辺な世界に包み入れられて行くといふことであります、私共は何も彼もおまかせした、さうなりません、何も浄土が斯様々々結構だから行くといふのぢやない、もう親鸞聖人が歎異抄の二章で云つておいでになる通りに、自分がお浄土に參るか、地獄におちるか、わがはからひととしてきめることではなくして、スツカリおまかせしてゐる。おまかせするといふのは、仏のまことを信ずる、仏のまことに触れてゐるのである。仏のまことにふれるとい

だくことが出来るといふところが、お経に出てをりますところの無生法忍むじやうほうにんといふむつかしい言葉でいつてをられますところはそんなことでありませう。私がそこまで行つてゐるといふのぢやありませんが、結局そこまで行くのであるといふ目的を与へられてゐることなのであります。

それからこの「忽ちのうちに諸仏の国に行つて一瞬にして帰つて来る」といふことは、これはほんたうに心の問題でありまして、一心に念ずるところに一切の神も仏もあらはれておいでになる。現れておいでになるといふのが、向ふに何か見るといふのぢやなくて、私共の心に感ぜられて来るのであります、さうでありますから、一瞬の間に、諸仏の国に行つて、一瞬の間にここに帰つて来るといふことも何となくうなづかれるわけであります。

つまりそれはさうであります。私なら私が死ぬる時が来て、お浄土に生れるといふのが、ゲーテのファストに書いてあるやうに、魂といふものを天使の群が抱いてスート天に連れて行くといふのであります、そんなことぢやない、何だか私の魂といふものが飛行機にのせられて、西方十萬億仏土につれて行かれる。そんなことぢやなくつて、私がこの世の息をひきとるといふ一瞬の、その一瞬のその間に、間隔かんかくもなく、そのままお浄土へといふことであります。

ふのは他ぢやない、この自分が、この世の無常にあふにつけて、もうすこしハッキリ言へば、この世の無常といふものに遭遇しゆざうへばこそ、この私といふものが、仏の常住じやうじやうのまことといふものをこの身に感ずる大事な縁になつてゐる。さうすると仏の眼から御覧になると、この無常流転むじやうりゅうてんのこの世の中の底の底を貫いて変らぬものを私共に廻向えんきやうして下さる、ふりむけて下さる。そのところにすつかりお任せしてこの世の生活をして行くといふところに、仏のお浄土に私なら私といふ者が生れさせて頂くところの御縁が、そこにひらかれてゐると申しますか、そこに鍵かぎを与へられてゐると申しますか、チャンと鍵は与へられてゐる。そして自分はすつかりおまかせして、お浄土は幸福の欲を満たしたり、耳や目を樂しませたりする、そんなことを目標めくにして行くところぢやない。唯この仏のまこと一つにおすがりして行くところであるといふところにすなほになつて来る。

さうすると私共になつて、この世のそのまの姿が見えて来る。この世のそのまの姿といふものは、それはこの生れたり、死んだり、出来たり、壊これたりして居るものの底に、さういふ無常流転むじやうりゅうてんの姿、その全体を諦観ていかんしたところに常住じやうじやうなものを感じるといふところまで、私共も導いていた

して、そのところはつまり、仏のまことの生命にすつかり入らせて頂く、この世の息をひきとるそのまゝである、その息の引きとり方がどんなであつてもかまはぬと云ふことになるのであります。

今日はさきに申しましたやうに、死刑囚の人に遭ひましたから種々のことを考へさせられました、實際この人間の死に様といふものは種々様々であります。

私が大変深いお導きをうけました臼杵うすき祖山先生そざんが七十七でおおくれになりましたが、これは腸に癌がんが出来て数ヶ月の間、おからだの上では余程の苦しみを續けておくれになつたやうであります。けれどもその苦しみの中に臼杵祖山先生は、毎日、毎日、何ともいへないお慈悲の味ひであります。仏のまことを御身にうけられた味を先生は詩を作つたり、或は歌を読んだりなさつたのを、それを一一、毎日書きつけてよろこんでおいでになります。それから太分たいぶん歳のちがつたお妹さんが最後までお看病なさつたのであります、そのお妹さんには芯から感謝のお言葉をのべられてあるところもあります。さうでありますから、仏のまことに包まれておいでになりますから、身体の上のいたみといふものは、毎日々々続きながら、そのいはば、そのお痛みをお忘れになつた風になつて毎日々々を有難いといふ心持になつておすこしになつてゐる。そしておおくれになつ

た。それだから、さういうこの信仰の篤い立派な方も、身体の上の病気の御縁といふものは仕方のないもので、そんなに苦しんでおかくれになるといふことも、実際としてあった。

或はさう云ふことでなしに、苦しみも何もなくて、脳溢血かなんかで、パット倒れて、もう数時間たないうちに亡くなるといふ人もあります。私の父方の祖母などはさうでありました。私がクラス会か何かでよそに行つてゐる間に亡くなつたので、弟がお祖母さんが亡くなつたと知らせに来たことがあります。苦しみも何も無い、斯う云ふ亡くなり方であります。この祖母はすこし仏法に志のあつた祖母でありました。

祖父の方は八十四まで長生きして、三日の患ひでありましたが、死ぬるといふことをよく知つて居りまして、御医者さんの薬なんかを飲まない。お医者さんから貰ふのならどうか毒を貰うて来てくれと、こんなことを申しました。三日ばかりの患ひで枯木の倒れるやうに、苦しみも何もなくて亡くなつたのであります。

それから私の母なんかは、流行性感冒のひどい時で、忽ち肺炎になつて、私は臨終の間にあひませんでした。いよいよ臨終の時はよく知りませんが、そんなに苦しんだやうでもないやうであります。然し、いよいよ自分は死ぬるといふことを自覚して亡くなつたやうであります。

『それから『水が飲みたい』と云はれたので、奥様が持つて来られると』あゝうまい。実にうまい。末期の水といふのがこれであらうか。戦場に出、第一線で戦死する兵士達はこの水も飲むことも出来ないで死ぬるであらうか、可愛想だ』

これが最後のお言葉であつたさうであります。ねむるが如く静かに往生なさつたと、これは実に立派な御臨終で、これは私の家内が直々に先生の奥様から承つてきた話でありますから間違ひなしであります。さういふお立派な御臨終もある。

昔の人で私の感激して居りますのは中江藤樹先生であります。これは仲々強いお方でありまして、御臨終近くになりました。奥さんも遠ざけ、お母さんもまだ残つておいでになつたのでありますが、そのお母さんも遠ざけ、藤樹先生は門人を前にお呼びになつて、自分はお座りになつて、『自分は死ぬる。自分が死んだら、この聖人の道を誰か伝えてくれる者があるであらうか、噫』

といふのが最後のお言葉で亡くなられたので、これはとても真似も何も出来ない立派な臨終であります。

そのやうに種々であります。人間の死に方といふものは、そんなことを考へますと私なんかはどんな死に方をするのか、ちつと心配であります。斯うなりますと歎異抄の『如何なる不思議の事にもあひ、また病悩苦痛せしめて、

私の父は、これはまた、長い間神経痛をやみまして、おしまひに腎盂炎といふ病気を引きおこしまして、高い熱が続き、それから亡くなつたのでありますが、これも自分が亡くなると云ふことを自覚して居りましたし、父はすこし楽天的なところがありました。別に宗教の信者といふのちやありませんでしたが、先づ最後の病床まで謡曲を歌つて死んだのであります。さういふ死方もあります。

それからまた先に申しました私の二十六歳の娘はあんな死に方、『仏様が見える』と申し、四歳で死にました娘の方は『すぐにおうちへかへりませう』と、仏様のお浄土に帰つて行くやうな言葉を最後の言葉として死にました。

ちやからまあ、死に方といふものは種々であります。私が大変に感心して感謝して居ります一つは、広島文理科大学の学長をしておいでになつた、私が十六年間もお世話になりました吉田賢竜先生、このお方は、もう前の年の秋頃から、自分の生命は長くないぞと前からよく申されたさうであります。そして昭和十八年の元旦に広島島の町はづれに観音様があります。そこへ散歩に行つて、そこから帰つてから非常にお疲れになつてお休みになつて、一月三日の晩でありますか、奥様に

『今夜はいくよ。が自分が死んだからといつて、すぐ皆様にお知らせするな。お前も大変疲れてゐるだらう。今夜はゆつくり休め。明日になつてからお知らせしたらよから』
正念に住せずして終らんに念仏まふすこと難し。……如何なる不思議ありて罪業をおかし念仏まふさずしてをはるとも速に往生を遂ぐべし。……あれがなければ私共はたすかりません。兎も角も、以上のべましたやうに、大事な人の死ぬるといふ事がお浄土を感じる大事な縁になると思ふのであります。

完

み仏を讃ふ

オルデンベルグ

恐るべき怒濤の巻きおこる時

水にかこまれしもの

老と死に迫られしものは

何処に島を見出すべき

劫波よ!

我れこれを汝に説示せん

『何物も存せざる所、何等の固持もあらざる所

そこに唯一の島あり、涅槃といふ。
老と死との終局なり』

編集後記

秋も過ぎて霜月となりました。稲田が一勢に刈り取られると、急に冬に真向ひます。恩師田中文男先生の御述懐に、「五十代はまだ若いと思ひましたが、六十を過ぎると、年をとるのが実に早い。新年を迎へると直ぐにもう十二月が目前に来てゐるやうな感じがして、四季の移り変りに目も留らざ、早い月日と競走してそれを追ひ越して行くのに喘いでゐるやうです……」とあります。いかにもとうなづかされ初めました。

この秋、福島先生の「近代思想と信仰」から「自由思想と信仰」の篇を、ベルリン留学中に、山田幸さんが独訳され、あちらの書店と交渉されてゐたのが先月立派な本となつて出版されました。ここに念仏の御縁がベルリンに結ばれましたことは誠に嬉しいことでもあります。福島先生の御恩と、山田さんの御苦勞に、唯々感謝申して居ります。

△「大いなる受入れ」は、かつて京都

の高倉会館で池山先生が講話された時の速記で、法蔵誌に当時のせられたものであります。「仏と人」の先生の御著書にも同じ題の記事がありますが、お講話だけに、やわらかで、親しめ、その香りも又格別な感じがいたします。この原稿を見出して下さつた丁子屋さんのお骨折を謹んで謝します。先生の忌月の記念にいたしました。

△「往生について」の福島先生の御講話は、微に入り細にわたり如何なる者をも、一人も漏らさじとの仏心の広大無辺を教へられました。ことに当日は、某死刑囚の方に御法話下さつたこととて、切々たる息吹を感じ、襟を正さしめられました。東京都調布市仙川町七九四が御住所であります。

△「無碍の一道」は、池山先生の追慕録といえました。それにより、仏智の有難さをいよく、渴仰申して居ります。善悪の二業、ともに執じては、僞慢となり、卑屈となる。その無明の幽霊を消除して、魂の全解放を頂くことは、まことに唯仏一道ひとり清閑の道味であります。

法悦抄

清水凡禿著、京都市左京区高野泉町、香華書館から出版さ

れました。定価二二〇、送料二〇。振替、京都二二一五。御知らせ申上げます。どなたにもよく解るよい書であります。

御案内

毎月、第一、二、三日曜、午後一時半、一道会館、講話。
市電、新郊通り一丁目下車、東一丁半
毎月十三日、午前午後、熱田区幡野町、願入寺、法話。
毎月廿四日、午前午後、昭和区小椋町、教西寺、法話。

定価	一部	十七四(送共)
	半年	百四(送共)
	一年	二百四(送共)
編集・発行人	花田正夫	
名古屋市千種区千種町馬走二八		
印刷人	奥川正生	
名古屋市南区匠上町二ノ二八		
発行所	慈光社	
振替口座名古屋一〇四七〇番		